

「頭蓋底骨折による髄液の鼻漏・耳漏が認められました。それに付随する鼓室内血腫により、軽度の聴力障害の可能性があります」

八意永琳は表情を変えず、事務的な口調で説明していく。

永遠亭を訪れた二ツ岩マミゾウが最初に通されたのは、まるで令嬢が身の純潔を告白するかのようにとどこか秘めやかで、そして何かしらの決意を感じさせる灰白い空間であった。光量はやや乏しく、しかしそれゆえに整然と配置された純白の椅子や長机が一層妖しく輝いているようだった。清潔感を感じさせる消毒薬の匂いが広げられた書類や葉棚、そして八意永琳本人から微かに立ち上り、底冷えのする春の月夜にも似た厳肅な情調を形成している。

「頭蓋底？」

「いわゆる頭蓋骨の底面、脳を支える骨の部分、ならばにその周囲の部位を指します。あなたは幻想郷の外から来た妖怪でしたね？ 底面に孔が空いている頭蓋骨格の標本なり映像なり、一度くらいは見たことがあるのではないのでしょうか」

確かに、マミゾウは医学テレビでそうした模型を見た覚えがあった。記憶を手繰って自らの頭の中にその3D CGを思い描いてみるに、頭蓋底の骨折がいかに悲惨なものであるかが嫌と言うほどよく分かったのだろう。「情報化社会さまさま、じやな」そう呟く彼女の顔は苦虫を噛み潰したようにしかめられていた。またその洗面はみるみるうちに不愉快そうな色を帯びていく。うら若い少女の形のない耳や鼻から、血の混ざって赤くどろどろになった髄液が垂れ流されていく様子を想像してしまつたに違いなかった。

「この孔の周辺には多数の脳神経が集中していま

す。そのため僅かな損傷であつても、甚大な障害を引き起こす場合が多いのです。それも複数。この患者の場合ですと、先の聴覚障害に加えて……」永琳はマミゾウに一枚の紙を手渡した。そこには【聴覚障害】を筆頭に、以下の様な文字が並んでいた。

【嗅覚脱失】……【緊張性気脳症】……【三叉神経障害】……【舌下神経障害】……【外転神経麻痺】……【舌咽神経麻痺】……【迷走神経麻痺】……

「……つまり？」

「味も匂いも分からなくなります。それどころか顔の筋肉や神経、その大部分が意味を成さなくなると言つてよいでしょう」

瞬間、マミゾウの顔が苦しげに歪んだ。いや、当の本人はそれを必死で堪えようとしているよう

であつたが——結局、今にも泣き出しそうな表情だけがそこに残されていた。

「……年頃の、おなご……」

腹の底から必死に絞り出したのだろうその声は、まるで吐き気を催しているかのように震えている。琥珀色の長い睫毛をたたえた瞼が、彼女の澄んだ瞳を何度もせわしなく覆い隠していた。やがて絶望にまみれ光に乏しいこの世界を自ら遮断するかのように、彼女の二つの瞼は固く伏せられたまま、音も気配もなく凍て付いた。

悲痛——悲痛なのだろう。そんなマミゾウの表情を横目に、八意永琳は「さらに加えて」と言葉を付け足した。

「Ⅱ度の熱傷が全身の22%、同様にⅢ度の熱傷が全身の7%に及んでいます。咽頭部の欠損により自発呼吸は困難、のちに感染症が併発する恐れもあります。打撲、骨折は全身に複数箇所存在して

おり、肝臓をはじめとした内臓のいくつかには裂傷が見受けられます。また搬送時には胸部圧迫による心タンポナーデを発症していました。処置は施しましたが、依然、挫滅症候群の生ずる可能性があるため注意が必要です。椎骨の損傷領域はC6・C7（※首の根本の脊椎を指す）で、これは脚の麻痺および両手の部分麻痺を引き起こしますが、幸いにして胴体の感覚は残り——」

「もう、いい」マミゾウは俯き、眼を瞑ったままに拒絶した。

「いえ。これは必要な説明なのです。もう少々ご辛抱下さい」

「……やめろ。儂にそんなことを説明して何になると言うんじや」

「止めません。現在、彼女の両眼球は白濁化しています。おそらく頸椎損傷時に目瞼を開いたまま意識を失い、また、倒れ込んだ先には火種となる

物が存在したのでしょう。それが眼前で燃え盛り——」

「やめろと言うておる」

その時マミゾウが覗かせたのは、畏るべき決意の色だった。右眼のみわずかに覗き、八意永琳を鋭く睨む大きな瞳……やはり琥珀色アンバー・ブラウンの虹彩は、ゆらゆらと怒りの輝きを宿している。それは尾を引く彗星のように眩しく、妖しく、冷ややかで、見る者に決して眼を逸らさせない異様な迫力を備えていた。

「……その熱で、眼球の蛋白質が変質したものと思われます」

永琳は控えめに言葉を継ぎ足し、これでお終いですよ、とばかりに肩をすくめて見せた。そのまましばらく二人は黙っていたが、マミゾウの意図を汲んだのだから永琳が、やがてポツリと、しかしいつもと変わらぬ口調で述べた。